

國學院大學學術情報リポジトリ

松浦理彩著『肥前磁器の意匠研究：
柿右衛門様式の成立と展開』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内川, 隆志, Uchikawa, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000563

〔書評〕

松浦里彩著

『肥前磁器の意匠研究—柿右衛門様式の成立と展開—』

内川隆志

本書は、松浦里彩氏の博士論文『柿右衛門様式研究—文様と構図の分析を中心に—』を基本に編まれたものである。松浦氏が研究対象とした柿右衛門様式は、1670～80年代前後に有田で生産された磁器の一大流行様式をさし、具体的には柿右衛門窯があった南川原山の製品をはじめ、有田の窯場で焼成された一群である。今日、柿右衛門様式という概念は酒井田柿右衛門家個人の製作と看做す点は是正されたが、酒井田家が中心となって技術開発に着手していたことは事実である。その根拠として柿右衛門窯に現在も残る800点以上の土型をあげることが出来る。従来言われているとおり色絵の技術は、初代柿右衛門（喜三右衛門）が成功したものと考えられ、このことによつて色絵が肥前有田の一大流行様式となったのである。初代柿右

衛門は、鍋島忠直に仕え、寛永十二（1635）年頃有田に入り、伊万里の陶器商人を介して清人から赤絵の技術を伝授され、泉山磁石場に近い有田東部の年木山（楠木谷窯周辺）で色絵の製品開発を行った。その後、万治二（1659）年からオランダ東インド会社の大量注文に始まる欧州への海外輸出が本格化する、1660年代に輸出港に近い有田西部の南川原に窯を移転したことが知られる。そして、柿右衛門様式最高峰の技術である「濁し手」の開発は1670年代に完成し、その最盛期は五代目当主が十九歳の頃の1680年代であった。生産規模は享保八年（1723）頃には減少したようで、六代柿右衛門が佐賀藩に提出した陳情書「口上手統覚」に困窮の様相を窺わせる記載があることから濁し手の技術が失われたのもこの頃とみられている。永い年月が流れ、昭和二十五年（1950）頃、十二代・十三代によつて濁し手の技術の復興に成功し、昭和三十年（1955）、「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選定、昭和四十六年（1971）には「重要無形文化財」に指定され、現在十五代が、酒井田家を継承している。

本書は、肥前磁器の精華の一つともいえる柿右衛門様式について先学の研究を網羅し、その捉え方を詳細に整理する一方、絵付けに関する要素の解明に重点をおいて、従来触れられる機

会の少なかつた文様の描法と配置に着目し、柿右衛門様式が隆盛を誇った延宝期を中心に展開した十七世紀後半の肥前磁器にみられる絵付けの形成要素や成立背景を分析した労作といえる。

第1章では十七世紀後半に比定される延宝期の柿右衛門様式の概念や定義を整理し、そもそも柿右衛門とは何を意味し、柿右衛門様式という言葉が示す作風とは具体的にいかなるものなのか。また、それらはどのような変遷を経て、陶磁史における定義として構築されてきたのか等について明らかにする。先ず柿右衛門というブランドの概念がそのような変遷で形成されてきたのかについて、近世から近代に至る諸文献を紐解いて解き明かす。『和漢三才図会』や『睡余小録』等の近世の文献に絵茶碗や柿右衛門人形の作者として初出することを明らかにし、近代初期には蛭川式胤の『観古図説』で赤絵の創始者として記録され、黒川真頼の『工芸志料』や横井時冬『工芸鏡』等の文献に陶芸家としての柿右衛門の事績が記録されたことを明らかにしている。大正年間には大河内正敏の『柿右衛門と色鍋島』が上梓され、本格的な柿右衛門研究の基礎が価格立し、昭和に入り永竹威の『図説日本の赤絵』によって、個人から離れた様式としての柿右衛門論が展開したことを確認する。さらに昭和五十年代以降に実施された柿右衛門窯の発度重なる掘調査に

よって柿右衛門様式とされる磁器の生産範囲が明らかになったことで概念形成の流れが整理されたことを指摘する。また、柿右衛門様式の捉え方について、従来どのような解釈がなされてきたのかについて整理し、「典型的な柿右衛門様式」と「広義の柿右衛門様式」に分類されその捉え方に幅が見られることが指摘され、さらに現在の柿右衛門研究の分類において比重が高い「濁手」の概念の成立に関して整理し、研究の余地を明らかにしている。

第2章では、肥前磁器における赤絵の創始について、初代酒井田柿右衛門の「覚」や三代の「申上口上」から、初代が赤絵の技術を開発した経緯と金銀彩の焼付けもはじめたことを指摘し、南河原に移って色絵磁器製作を行い、正保三年(1646)頃から売却を行なっていたことも追求する。また、赤絵の創始年に関する根拠史料を提示し、赤絵の技術は寛永十八年(1641)から慶安四年(1651)には習得されていたことが指摘されている。加えて肥前磁器における延宝期頃の作例の検討から1670年代にいわゆる初期色絵から作風が変化していき、1680年代頃にある程度安定すると、1690年代にかけてさらに洗練されたものが十七世紀後半の肥前磁器に見られる作風と結論づけた。「典型的な柿右衛門様式」には、①

濁手素地②繊細な輪郭線③赤・青・緑・黄+金・紫などの色彩④左右非対称で余白の多い構図の明確な基準がある一方、「広義の柿右衛門様式」には染付が使用できない濁手素地を用いることから、染付が使用されている時点で「広義の柿右衛門様式」に分類されるという。さらに、ここから外れる作例を統合したものが延宝期を中心とした十七世紀後半期の肥前磁器の作風の全体像であるという考えを示し、その詳細を明らかにするという研究の方向性を示している。

第3章では、第2章までにまとめた柿右衛門に関する研究史を整理した上で、十七世紀後半期の肥前磁器の作風の具体的検討を行なっている。その方法として当該期の肥前磁器に見られるモチーフとその描写法を分類し、4000点を超える膨大な量の近世の肥前磁器を対象に松・竹・梅・鳥・柴垣・菊・蝶それぞれの文様について延宝期を中心とした描法とその特徴を抽出し、彩や形態などの細部の変化に沿ってこれらを四六種類に分類した。その結果、正保期から元禄期にかけて同じモチーフでも明らかに描写が変化していること、延宝期を境に登場する文様表現があること、寛文期から延宝期にかけて大胆な構図の変化がみられることなどを指摘した。特に亀甲型の梅文様に着目し、その作例が柿右衛門古窯操業期間終了後の1680年以

降の作である可能性を導き出している点は注目すべき成果と言える。また、モチーフの選択についても「色絵粟鴉文八角皿」の図様に注目し、中国故事由来の画材に基づきながらも大和絵の要素を取り入れた「絵画的」表現となっている点を指摘する。

第4章では、主に「余白」のある構図に注目し、その構成方法と成立背景について、特に竹・鳥・柴垣・菊・蝶の五文様の配置と構図を分析の対象とし、特に鳥や蝶の配置は延宝期になると鳥は軽やかに宙を舞う構図を取り、白素地の範囲が広がり、蝶も広い空間を引き締めるが如く配置される構図を取ることを指摘している。また、該期の和鏡の鏡背文様にも注目し、その構図には、磁器と共に狩野派の絵画との共通性があることを見出している。つまり、延宝期の肥前磁器と時代を同じくする絵画や工芸の画題には相関関係があり、それが時代の傾向として現れていることを具体的な事例を用いて説いた。絵付けの分析結果やその方法論が陶磁器のみならず、他の工芸品に対しても製作年代などを推定する要素となりうる指摘が重要な点である。

第5章では、「色絵双鳥松竹梅文輪花皿」と、類例品の「色絵柴垣松竹梅鳥文輪花皿」を対象に分析を進め、改めて延宝期の肥前磁器の絵付けの特質を考察している。また、西欧における収集の歴史や模倣例など、海外における肥前磁器の展開に着目

した結果、柴垣文様や梅鶉といった特定のモチーフの組み合わせに高い需要が認められることなどを提示するに至っている。重ねて、19世紀後半にフランスで制作されたセルヴィス・ルソーの陶磁器の特徴である花鳥文様を主とし、白素地をみせるように空間を意識してモチーフを配置する構図にも、柿右衛門様式の影響を受けていることを指摘している。

終章では、各章の振り返りとまとめをおこない、今後の研究課題として今回分析対象とした皿、鉢以外の器形や土型整形による器種の絵付け、また、元禄柿と言われる柿右衛門が手がけたとされる一群や、1810～1850年頃に製作された「酒柿」銘の検討、さらに柿右衛門人形や置物等の詳細な検討を課題としてあげている。最後に付された資料編は、意匠集成として第3章で行った文様の描法分析、第4章で行なった文様配置の分析に用いた文様を「柴田夫妻コレクション」（佐賀県立九州陶磁文化館蔵）から抽出して写真図版と一覧表にまとめたものであり、分析を補完する重要な役割を果たしているが、「柴田夫妻コレクション」に限定したことによって「該当作例なし」の空欄を生む結果となった点は心残りである。

本書は、学史を十分に踏まえた上で柿右衛門様式を軸に、肥前磁器の徹底した意匠研究から文様と構図の分析を通じて、そ

の構成要素や成立背景を明らかしようと試みた労作であり、斯界に新たな一石を投じる内容と評価できよう。

（A5版上製、四〇二頁、同成社、二〇二二年三月発行、
一、一〇〇〇円＋税）